

もう見ちゃった?

# 映画「アルキメデスの大戦」の撮影が舞鶴でも!



『永遠の0』山崎貴監督が描く「戦艦大和」。  
菅田将暉・館ひろし・柄本佑・浜辺美波・笑福亭鶴瓶・田中泯ら豪華キャスト集結の映画「アルキメデスの大戦」(監督・脚本・VFX:山崎貴)。昨年7月に、市内3か所(赤れんがパーク、旧北吸浄水場配水池、日本板硝子社宅)で撮影が行われました。市内を含む全国から延べ160人のエキストラが参加した撮影の様子を紹介します。

◆舞鶴フィルムコミッションの活動  
舞鶴フィルムコミッションは、映画やテレビドラマ、CMなどのロケ撮影を誘致・支援する窓口です。映像化による舞鶴市のPRやイメージアップをはじめ、映像制作による地域資源の新たな魅力発見と、市民参加による地域の活性化を促します。  
《観光振興課》

撮影に潜入

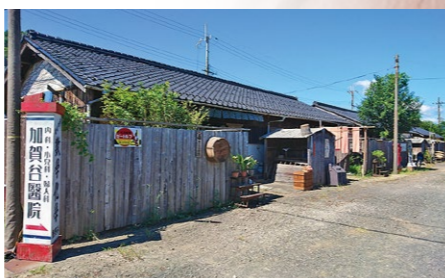
100人のスタッフによる舞鶴の3か所の撮影。見慣れた風景にセットが組まれると、まるでときにタイムスリップしたようです。



▲舞鶴赤れんがパーク



▲旧北吸浄水場配水池



▲日本板硝子社宅



## アルキメデスの大戦

The Great War of Archimedes

1933(昭和8)年。欧米列強との対立を深め、軍拡路線を歩み始めた日本。

海軍省は、世界最大の戦艦を建造する計画を秘密裏に進めていた。「今後の海戦は航空機が主流」という自論を持つ海軍少将・山本五十六は、巨大戦艦の建造がいかに国家予算の無駄遣いか明白にしようと考えていた。しかし戦艦に関する一切の情報は、建造推進派の者たちが秘匿。



そこで山本が目をつけたのは、100年に1人の天才と言われる元帝国大学の数学者・権直。頑なに協力を拒む権に、山本は衝撃の一言を叩きつける。「巨大戦艦を建造すれば、その力を過信した日本は、必ず戦争を始める」。この言葉に意を決した権は、帝国海軍という巨大な権力の中核に、たったひとりて飛び込んでいく。天才数学者VS海軍、かつてない頭脳戦が始まった。

同調圧力と妨害工作のなか、巨大戦艦の秘密に迫る。その艦の名は、【大和】…。

戦艦大和の建造をめぐる“机の上の大戦”が始まる。

これは、帝国海軍という巨大な権力に立ち向かい、数学で戦争を止めようとした男の物語。



© 2019「アルキメデスの大戦」製作委員会 ©三田紀房 / 講談社

赤れんが  
公募美術展  
舞鶴市展 2019

## 最優秀賞作品を紹介

6月22日～30日に赤れんが2・5号棟で赤れんが公募美術展舞鶴市展2019を開催。5部門で計205作品が展示されました。各部門の最優秀賞をはじめ、優秀賞10点、奨励賞21点、U-22審査員賞6点が選ばれました。各部門の最優秀賞は次のとおり。  
▶詳しくは、文化振興課(☎66・1019)へ。



【洋画の部】「重ねる」(50号) 大塚 花夏さん(19歳、京都市)  
明瞭な主題を堂々と描き切り、人が手で「手を描く」というアナログな行為を重厚に表現されています。(審査員:森井宏青)



【日本画の部】「雲立つ」(50号) 分野 英子さん(79歳、満尻)  
丁雲と水面という難しいモチーフをよくまとめ、絵具もうまく使いこなし美しい絵です。(審査員:池内璋美)



【書の部】  
「幽齋の籠城」(240号×60号)  
前田 智穹さん(50歳、安岡)

濃墨で羊毛を駆使し、粘りのある線質で堂々と書き上げ、細字の細やかさがタイミングよくマッチし、魅力的な作品になっています。(審査員:稲垣小燕)



【写真の部】  
「舞鶴港・旭彩気嵐」  
(51.5号×62号)  
林 正武さん(75歳、吉野)

舞鶴港で写されたとは思われないほど見事な気嵐の作品です。対岸の景色が見えないほどに立ち上がっている気嵐の様子が釣り人と漁船が写し込まれていることでよくわかります。(審査員:永野一晃)



【工芸美術の部】  
「潮舞」(36号×33号×33号)  
大槻 徹さん(62歳、竜宮町)

丸い器形の口縁を水がはしける様相にすることにより、全体に動きが出て興味深い秀作になっています。(審査員:高坂嘉津幸)